

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第194号

イザヤ 65:1

平成23年11月25日

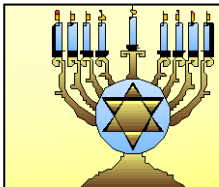
初めに、神が天と地を創造した。地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。神は仰せられた。「光あれ。」すると光があった。神は光を見て良しとされた。神は光と闇とを区別された。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

……神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」神は人を御自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあつて、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」そのようになった。神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。 創世記1章

今年十月三十一日に世界総人口が七十億人を越え、十一月末現在、すでに七十億五百九十万人を突破、国連データによれば、一日に二十万人の割で増え続けているといひます。この晴れの日に生まれた世界中のすべての赤ちゃんには、お祝いの認定証が贈られたとのことでした。しかし、この割で人口増加が続けば、地球がパンクしてしまうのではないか、あるいは、深刻な水と食料不足の対策を考えなければならないとマスコミは悲観的に予告していますが、今月はまず、人類がこれだけの人口に至るには、どれくらいの年数がかかったのだろうかという興味深い話題を取り上げてみたいと思ひます。進化論的考えでは、人口増加には途方もない年数を必要とし、宇宙誕生の最初の百数十億年は人口は零で、数千年前に突然人口増加が始まったこととなります。今年七月二十九日刊行の「サイエンス誌」は、「人類（ホモサピエンス）は、少なくとも二百四十万年の間、食物を捜し回つて暮らし、今からはぼ一万年前の『完新世（沖積世）』の時代に、農耕文化の始まりとともに人口増加が始まった」という人口統計学の専門家ポケット・アペルの話を載せていました。意義深いことに、六日間の天地創造、人間史が数千年であることを主張する聖書は、最初の人類誕生時から、神が農耕作に必要な「種」をすべて与え、人が農耕に携わつて人間史を始めたことを明らかにしています。ポケット・アペルによれば、農耕文化が始まったとき、世界人口は六百万人で、このことは二百四十万年間にたった六百万に至つたということで、その人口増加率は0.000000009と算出され、実質的に「零」ということになるのです。

対照的に、歴史的に観察された増加率は2%以上にもなつた時期も含めて、平均で少なくとも0.4%とみなされています。今日の七十億の人口に達するのに、果たして何年を費やすことになるのかを $P = P_0 e^{rt}$ の数式で計算したところ、ポケット・アペルの見つものに従ひ、産業革命以前の農耕に従事した時代の人口増加率、年0.1%で計算した数値でさえ、たった7062年にすぎないことが明らかになったとのこと。年率0.4%で計算すれば、もっと短期間で今日の人口に至つたということになるのです。人類は今世紀になって初めて、人口増加を危惧しなけりならなくなつたのではなく、人類の始まり直後から人口は着実に増加してつたと考えることは自然ですが、ポケット・アペルは、人類誕生以来の遅々たる人口増加を「出生率の増加が始まつた直後、死亡率が増加した。死因は致命的なウイルス感染によるものであつた」と説明しています。しかし、人口増加が途方もない長期間、ほぼ零になるような伝染病が続くことはあり得ず、史上、大量虐殺などで全人口が抹殺されるような出来事が起こらないかぎり、そのような説明が不可能なことは素人にも予測のつくことです。言うまでもなく、現在の世界人口の増加率は、聖書の主張する人間史に完全に一致するのです。専門家たちは、過去四百年間の人口調査の記録を用ひて、自然対数関数的な人口増加を想定して、今日の人口に至る年数を算出しました。その結果、四千五百年前、ノアの洪水の生存者八人から人類が全地に満ちたとすれば、今日の人口はまさに七十億人になることが分かつたのです。奇しくも、人が擁護する進化論の古い地球、斉一説ではなく、神の言葉、聖書の語る若い地球、激変説が裏づけられたのでした。

他にも若い地球を証明する証拠がたくさん挙がっていますが、最近、岩塩の中に閉じ込められたバクテリア（細菌）の例が報告されました。米国のカリフォルニア州のデスパレーで岩塩の結晶中の液体の中に閉じ込められたまま、細菌



暗闇から光を切望する時節がまた巡ってきました。

世の光、イエス・キリストは、人類の救いのため手を差し伸べておられます。

主、イエスを受け入れ、信仰、希望、愛が、

皆様の心に灯される時節となりますようお祈りいたします。

が何万年も生きていたことが発見され、地質学者たちはその岩塩の結晶が何と三万四千年も前ののものであると見積もりました。デスバレーの岩塩を研究しているブライアン・シューベルト研究員は岩塩の結晶中のミクロンという少量の液体の泡の中に微細菌が閉じ込められているのを発見し、岩塩から解放したところ、身動き一つせず、繁殖も全くしていなかった微細菌がにわかに繁殖を始め、食べ、死ぬという通常の細菌の一生を遂げたのでした。研究者たちの間で三万四千年もの長い間、どのようにして細菌が生きることができたのかという疑問が持ち上がりました。答えの一つは、泡の中に細菌のえさとなった藻類も閉じ込められていたというものでした。その藻類は単細胞緑藻の好塩性微細藻類で、岩塩の中で細菌の冬眠中ずっと生命源となる滋養を与え続けてきたのでした。牢獄から解放された微細菌は元気を回復し、繁殖を続け、二カ月余生きたのです。明らかなことは、この微細菌ははるか前に閉じ込められたときと全く同じ状態から再び生き始めたということですが、科学者たちの中には大きな問題が持ち上がりました。この発見が、細菌の中のDNAは年数とともに分解、退化するという理論を否定する例証だったからです。答えは、その細菌が昏睡状態中にDNAをなんとか修復することができたとみनाすか、その細菌のDNAを構成するヌクレオチドが例外的に耐熱能力を備えていたとみナすか、あるいは、デスバレーの岩塩が、地質学者たちがみなしているようには途方もなく古いものではないか、のいずれかということになるのです。シューベルト研究員の成果はほかの幾つかの研究機関でもくり返され、その発見が偶発的なものではないことが実証されていますので、この謎は、神が科学を用いてまた別の新しい発見を許されることにより、遠からず解明されることになるでしょう。聖書は若い宇宙、地球を宣言しており、デスバレーはじめ米国のグランドキャニオンに見られるような雄大で美しい地層は、進化論者が唱えているように途方もない年代を経て積み上げられた層ではなく、ノアの時代の世界的な大洪水によって、一瞬のうちに造り上げられた土砂の堆積層なのです。水が引くときにこのような堆積層が一瞬のうちにできることはすでに科学研究機関の実験では実証済みのようですが、この世はなぜか人間の理論を正当化し、現実のデータを無視する傾向があるようです。しかし、肉眼では認識できず、通常は人が存在を認めないようなミクロンというサイズの細菌をも目的を持って造られた創造者なる神は、今日、皮肉にも細菌（バクテリア）を通して、人類に語りかけておられるのです。

2010年春、メキシコ湾沖合でBP社の石油掘削施設が爆発し、大量の原油が海底油田から流出するという大事故が起きました。海洋、環境汚染問題が取り沙汰され、メキシコ湾が石油漬けになるだけでなく、大西洋まで被害が拡大することが懸念されましたが、果たして五百万バレルもの流出原油はどうなったのでしょうか。昨年十二月に、流出原油はすでに消失したという最終公認報告が発表されました。メキシコ湾には、毎年、油送船や掘削施設や船から11.8万キロリットル余の石油が漏れており、これらをすべて取り除いたとしても、毎年16万キロリットルもの大海からの原油の自然流出にさらされているそうです。興味深いことに、これら常時しみ出ている石油のおかげで海面に石油を餌とするバクテリアが密集しており、昨年のBP社の惨事を最悪から守ったといえます。石油の自然流出が他地域よりも多いメキシコ湾の海水には、石油の主成分の炭化水素が常時補給されていることにより、これら石油を餌とする生殖力旺盛なバクテリアが、爆発で流出した多量の原油の大部分を驚くべき速さで食い尽くしてしまったのでした。流出後一日で、事故現場の海域のバクテリアの数は十倍になったといえますから、そのすさまじさがうかがえます。幸いにも、事故二カ月後の七月末には、焼失、消散、蒸発、大洋の流れなどの要因も加わって、問題はほとんど解消したとのことでした。七月から八月にメキシコ湾からの海水を用いて、さまざまな種類のバクテリアが群れをなして石油にとびつき、食い尽くす実験を行ったところ、六日足らずで炭化水素をもはや検出できないほどに浄化されることが観測され、実際、今回の爆発事故も深刻な環境汚染に至ることなく、むしろ自然自体に自浄作用があることを改めて証明することになったのでした。神がご自分の似姿に似せて造られた人、一神の家族の重要な構成要員一のための人間原理の宇宙、地球には自浄作用、再生力が備えられており、バクテリアもそのために大きな役割を担っているのです。神が責任を持って環境保全、自然管理をしてくださっていることは間違いないことですが、しかし、石油を食べたバクテリアが人の健康に有害な化学物質をどの程度まで放つのかに関してはまだ解答が与えられていないようです。海面の流出原油の問題は解決した一方で、水生ほ乳動物、鳥、魚、貝類の大量死が事故に伴われ、バクテリアのような迅速な再生力、繁殖力のないこれらの生物の復興は難しいとされています。

日本では、今年十月に放射性物質を食べる藻類「バイノス」が発見され、福島原発の原子炉溶融により放射能汚染を受けた土壌を浄化する可能性に光を投げかけました。また、先に挙げた石油を食べたバクテリアから石油を吐きもどさせる試みであるかのような、やはり海草の仲間の微細藻類からの石油産出企画が日本で着々と進んでいるというニュースは、資源には乏しいが至る所海藻にとり囲まれている島国日本の未来に向けて、新しい希望の門戸になりそうです。神は諸国民に所有地の境界線を敷かれたとき、それぞれの割り当て地に秘められた宝を授けられたと私は信じていますが、神がイスラエルの族長ヨセフに「**主の祝福が、彼の地にあるように、天の賜物の露、下に横たわる大いなる水の賜物…芝の中におられた方の恵み**」（申命記12：13-16）を約束され、一昨年、イスラエルに海底大油田があることが明らかになったように、日本にも最高の賜物を用意しておられるように思います。日本の人たちが、聖書が証しする唯一真の神を信じ、神がすべての人の心に潜む罪の問題を解決するために送られた御子イエス・キリストを、自分の罪を赦す「救い主」として受け入れるとき、神は逆境を克服する知恵と力を与え、恵みで満たしてくださるに違いないのです。